

文化翻訳のバイリンガリズム ——複数言語のせめぎあいから——

砂野幸稔

0. はじめに

タイトルは主催者から与えられたものですが、冒頭の「文化翻訳」ということばには若干の違和感があります。あまり使ったことのないことばだということが第一の理由ですが、もう一つは、そこには二つの、あるいは複数の、截然と区別される、そしてそれぞれが閉じた系を形成している「文化」や「言語」が存在するという前提があるように感じられるからです。

私は、現在使われている「民族」や「文化」や「言語」などということばは、近代ヨーロッパの国民国家イデオロギーとともに作り上げられたものであると考えています。ミシェル・フーコーは『言葉と物』において、近代のエピステーメーとしての「人間」の誕生に預かった「学」として、経済学、生物学、言語学をあげています〔フーコー 1974〕。そこに共通してみられるのはひとつの閉じた系としての対象認識のあり方です。

「バイリンガリズム」あるいは、「多言語主義」、「複言語主義」などという、言語を可算名詞としてとらえる考え方、つまり、それぞれが独立して閉じた系を形成する「言語」が、截然と区別され、数え上げることができるものとしての言語のとらえ方は、そうした認識のあり方からきているのではないかと思います。

西アフリカのセネガルにおける言語使用のあり方に関心を持って、二十年あまりいろいろ学ぼううちに、私は、そのように截然と区別される文化や言語などというものは一つのフィクションにすぎないのではないか、と思うようになりました。もちろん、現実はそのフィクションによって変容されてしまい、それがいまではわれわれを規定している、というのも事実なのですが。

ここ数年、私は多言語主義をめぐる議論に疑問を持ち、その中で言語の問題を考えてきました。この報告では、タイトルの前半については十分な議論はできないかもしれませんが、「複数言語のせめぎあい」というタイトルの後半を出発点に、複数言語が存在する世界で、「言語」とは何なのか、多言語にしろ、複言語にしろ、あるいはバイリンガリズムであるにしろ、言語を可算名詞として扱うことが何を意味するのか、ここ数年考えてきたことを話させていただきたいと思います。

その上で翻訳、バイリンガリズムという問題についても、私の問題意識とのかかわりのなかで考えてみたいと思います。

1. 文章語を背景としないオーラルなレベルの言語使用と文章語を背景とする言語使用を同じ水準で語ってはならない。

1) 文章語の支配

リテラシーとオラリティということばを避けるのは、文化人類学領域で一時期議論された大分水嶺論的な理解によって生じる誤解を避けたいためです。かつて文化人類学領域では、文字を持つ民族と文字を持たない民族では認識のシステムが違うとか、未開人の思惟は文明人の思惟とは異なっている、とかいう二項対立図式があり、それがその後批判されるという流れがありました。

私の理解では、ジャック・グディにしるウォルター・オングにしる、文章語を背景とした社会システムの特性とその中で人間の思考のシステムの変貌をかなりの確にとらえているように思えます[グディ1986、オング1991]。ただ、彼らは「未開社会」あるいは「口承的古代」との対比という手法をとったために、議論の全体を「文明」と「未開」の二項対立図式の中で理解されてしまい、一時期一世を風靡した文化相対主義によって批判されるという結果になってしまったのではないかと思います。

この問題に関しては、私は、マーシャル・マクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』が、オングと同じミルマン・パリーのホメロス研究から出発しながらも、より明確な歴史的射程を示すことに成功しているのではないかと考えています。マクルーハンは次のように言っています。印刷物は最初の大量生産商品であり、「活版印刷は言語を認識と探求の手段から、ポータブル商品へと変える傾向を示した」。「印刷は、民族語をマスメディアという閉じられた系へと変質させることにより、近代ナショナリズムの画一的にして、中央集権的な勢力を作り上げた」[マクルーハン1986, 246, 303]。

マクルーハンはしばしば非ヨーロッパ文化に対して露骨な偏見を見せますし、警句風の断片的な記述ははなはだ読みにくいのですが、ヨーロッパで進行したアルファベットと活版印刷術による人間社会のあり方の根本的変化を、すでに1962年の時点で鋭く捉えています。ナショナリズムも資本主義も、アルファベットと印刷技術、大量複製技術によって生み出された、という指摘は、彼の本が出てから数十年たって展開されるようになったナショナリズム論とも通底するものです。

アーネスト・ゲルナーは1983年に原著が出た『民族とナショナリズム』において次のように論じています[ゲルナー2000]。近代の産業社会においては、高度な分業と絶えざる技術変革の故に社会的流動性が高まるため、効率的な再配置を可能とするために、共通で標準化された教育訓練が必要となり、それは標準化された文章語、つまり「国語」で行われる。この国家による「人間の品質管理」によって、同質的な人間が生み出され、そうして押しつけられた同質性こそが、ナショナリズムという形をとって表面に現れる、というのです。

近代国民国家とともに作り上げられた「民族」「文化」「言語」は、それぞれが独自の閉じた系として認識されますが、それは固定化され、画一化された文章語の存在によって裏付けられるものなのです。その延長線上で、「未開」民族の「言語」や「文化」も、同じ認識枠組みによって、それぞれ閉じた系として対象化されることになりました。

2) オーラルなレベルの言語使用における「言語」「文化」の境界のあいまいさ

しかし、セネガルで複数の「言語」を当たり前のように使い分け、あるいは混ぜ合わせて使っている生活のなかにしばらく身をおいた経験から私が学んだことは、文章語を背景としないオーラルなレベルの言語使用においては、言語についても文化についても境界は曖昧であり、単位としての切り取りは常に恣意的なものにすぎない、ということでした。私が出た感触では、生活世界の中で実践されているのは、ソーシャルの言ったとされる、閉じた系としての「ラング」から発する「パロール」の交換というよりも、境界の定かでないアバウトな言語知識をそれぞれの経験則で運用する無数の「言語ゲーム」であると考えた方が妥当であるように思います。現にわれわれがいま、「ネコ」と言い、「cat」と言うとき、「ネコ」と「cat」は、日本語世界における英語の巨大なプレゼンスのなかで、日本語と英語という二つの「ラング」のなかで、それぞれが別々に世界を切り取っているシニフィアンではなく、日本語も英語も存在する生活世界のなかで、場面によってわれわれが行っているさまざまな「言語ゲーム」のなかに、同時に存在しているものではないでしょうか¹⁾。

実は、閉じた系としての「ラング」を言語から抽象して、近代言語学の基盤を作ったと言われるソーシャルも、そのことを誰よりも意識していたということが、この十数年の、とくに日本における研究でわかってきています。最近のものとしては互盛央氏の『フェルディナン・ド・ソーシャル』が、「国語」の思想に席卷されるヨーロッパにおいて、「国語」として切り取られる「言語」ではなく、境界不在の多様性と時間の中で変化し続ける<言語>をとらえようとしたのだ、ということを見せてくれます[互 2009]。

前田英樹氏の『沈黙するソーシャル』では、ソーシャルのジュネーブ大学就任講演が紹介されていますが、それを読むと、ソーシャルが語ろうとしていた<言語>とは、人々が日々ことばを交換する中で、時間軸においても、空間配置においても、多様で変化し続ける一方で、常に<同じ>ものとして認識される<言語>だということがわかります[前田 1998/2010]。人々は常に昨日話していたのと同じ言語を話しているのに 100 年を経て比べるとそれが異なった言語に見えるのであり、旅人は、旅の中で出会う人々との会話の中で、出会う人ごとに少しずつ違った話し方を耳にすることになるけれど、明確な境界に出会うことはありません。

日常言語の世界では、「異」言語間であろうと「異」文化間であろうと、「言語ゲーム」は順調に行われているのです。

2. 言語、文化に境界を引き、類的存在としての言語、 文化を発明したのは近代ヨーロッパである。

1) 「国語」の誕生

「多言語主義」や「多文化主義」ということばは一見多様性を言祝いでいるように見えますが、実際には「言語＝民族＝国家」という 19 世紀ヨーロッパ型国民国家の理念型が破綻したあと、開かれてしまったパンドラの箱の呪いに、従来の枠組みであたふたと対処しているようにしか私には思えません。「言語」は、確かに、あるときから、われわれにとっての呪いになったのです。

いつから「言語」は呪いとなってしまったのでしょうか。それはバベルの昔にさかのぼるも

のではありません。オーラルなレベルでは雑多な言語の存在は呪いではなく、「言語ゲーム」は常に順調です。この呪いは、近代国民国家の達成の代価にほかなりません。

1990年代の国民国家批判の大合唱のあと、ここ数年、リベラル・ナショナリズムの見直し論が登場していますが、そうした動きとは別に、「国語」をめぐる国民国家の達成についても再評価しておく必要があるのではないかと思います。そのためには「国民国家」という理念型を作り出したヨーロッパにおいて、何が起こったのかを見ておく必要があります。

ヨーロッパ近代は、神によって権威づけられる王権に替わって、「国民」の根拠としての「文化」と「言語」を発明しました。中世までは、ラテン語が実質的には唯一の書記「言語」として雑多なことばの上に君臨していましたが、まず、いくつかの俗語が書記化され、さらにそれが、固定化され、画一化された「国語」として成立しました。この過程を、ダニエル・バジオーニは『ヨーロッパの言語と国民』において、「エコ言語革命」という概念を用いて、次のように説明しています[バジオーニ 2006]。

まずルネッサンス期から「第一次エコ言語革命」が進行します。中世期までは、書記言語の地位は事実上ラテン語によって独占されていました。その他は雑多な話し言葉にすぎませんでした。ルネッサンス期からそうした話し言葉の内のいくつかは、安定した行政国家の後ろ盾や、出版資本主義の発達によって、書記言語として成立し、口頭言語としても拡大して「共通語」として発展していきます。

ついで18世紀から19世紀にかけて「第二次エコ言語革命」が起こります。その過程で、すでに成立していた複数の共通語のうち英語、フランス語、スペイン語などが「国民国家」の「国語」となり、ウェールズ語、ブルトン語、カタルーニャ語などの国民国家内の少数言語や、他国の政治的文化的支配下におかれたポーランド語、ハンガリー語、チェコ語などが没落します。成立した国民国家においては、「国語」による識字化を通じた領域内住民の「国民化」が行われ、少数言語、方言は撲滅の対象となります。国民教育、メディア、徴兵などがこのプロセスを完成させ、二度の世界大戦を経て「国民国家と国語の勝利」が達成されます。バジオーニはこのプロセスを「国語による舗装工事」と呼んでいます。

さて、このプロセスについては二つの側面を見ておく必要があります。ひとつは、国民国家批判、国語イデオロギー批判の中で語られてきた「国語」による画一化と排除、分断の問題です。国民国家による国語の権威付けは、ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』で語った「ディシプリン」の学校教育を通じた内面化、ピエール・ブルデューが言う「正統言語」の言語市場における君臨と、それによる分断をもたらしました[フーコー 1977, ブルデュー 1993]。この点については後ほどあらためて触れたいと思います。

しかし、その一方で忘れてはならないことは、「国語」となった新しい文章語が、理性的で自律的な主体としての「人間」という近代啓蒙主義の理念を担うものでもあったということです。18世紀の啓蒙主義の人間観の重要なポイントは、一握りのエリートだけでなく万人が理性的、自律的「主体」となり得る、ということでした。「人間」が、しかもすべての人間が、この世界の「主体」になり得る、というのが近代の壮大なプロジェクトでした。それがいかに多くの矛盾をはらんだものであるとしても、自由と民主主義という、現代世界において「普遍的」とされている価値は、この理性的で自律的な主体としての人間というものを前提とせずには成り立

ちません。

そして新たに成立した文章語のリテラシーは、その理性的、自律的主体としての「人間」を基礎づけるものでした。「国語」は、少数のラテン語エリートに独占されていた知と思索が、容易にアクセス可能な俗語を通じて普遍化する契機でもあったのです。平等で自由な主体としての「人間」という近代啓蒙思想の理念は、「国語」を通してはじめて現実的なものとなった、とも言えるのです。「人間」は「国民」としてしか誕生し得なかった、といってもよいと思います。

2) ヨーロッパ諸「国語」と翻訳

さて、ここで翻訳について考えてみると、ヨーロッパで誕生した諸「国語」は、二つの方向の「翻訳」を通じて自らを豊富化しました。ひとつは、古典語、とりわけラテン語からの翻訳です。とくに聖書がそうですが、アラビア語にしる中国語にしる、他の文明語は、ほとんどの場合、その影響圏のなかでは翻訳を経ずごく一握りのエリートによって直接読まれていますので、まずこれが新しいことでした。何よりも重要なことは、諸「国語」が、自らを古典語と対等のものとして位置づけたということです。類的存在としての「言語」の誕生です。この方向は後に主要なヨーロッパ語から後発国語へという形で踏襲されることになります。類的存在としての「言語」の普遍化です。

とりわけ、ヨーロッパの経験が特異であったといえるのは、新たに登場した諸「国語」間の相互翻訳という実践です。ヨーロッパの諸「国語」間では、近代科学の諸概念と政治、経済、文化にかかわる諸概念を共有していく過程が進行しました。その具体的な過程についてここで詳述するゆとりはありませんが、相互の差異を不断に再生産しながらも、諸概念が「普遍的」なものとして共有される諸「言語／国語」の共有空間が生み出されていったのです。

この相互翻訳と諸概念の共有こそがヨーロッパ的普遍である、と私は考えています。普遍とは、理解の共有であり、議論を通じた合意の形成にはかなりません。ヨーロッパ近代が生み出した諸概念が普遍的たり得たのは、キリスト教とラテン語という共通の基盤があったとはいえ、それが数世紀にわたる諸「国語」間の相互翻訳と不断の議論を通して共通理解の場を形成してきたからだだと思います。科学的諸概念、「人間」という価値、そして「自由」や「民主主義」という諸価値は、唯一の「真理」として登場したのではなく、討議を通じた理解の共有としてあらわれてきたのです。「自由」や「民主主義」という概念が普遍的であり得るのは、それが各国、各言語における実践と相互検証、相互批判を経て、一定の共通理解が形成され得る限りにおいてです。

ヨーロッパが自らを形成してきた相互翻訳と討議の歴史を忘れ、モノローグに陥ったとき、それは独善となりました。植民地主義と人種主義のヨーロッパはまさにその独善のヨーロッパでした。しかし、ヨーロッパ的普遍の独善の批判から、ナイーブな文化相対主義に陥ってはならないと思います。現代世界はひとつのものであり、それは好むと好まざるとに拘わらず、ヨーロッパ近代が主導して成立した世界です。もはやヨーロッパは中心ではなく、相互翻訳と討議は非ヨーロッパの諸言語、諸文化との間でも行われつつありますが、より高次の普遍にいたる対話は、ヨーロッパ近代が主導して成立した、理解の共有、合意の形成というこの「普遍」を足がかりにしてしか成り立ち得ないのではないのでしょうか。

3) 後進国民国家の「近代」への参入

さて「国語」と「人間」の問題に戻りますと、「近代」に参入しようとした日本などの後発国民国家は、ヨーロッパ近代が形成した「普遍」に参入することを選びました。それはヨーロッパで形成された科学、政治、文化に関する「普遍的」諸概念を自らの「国語」の中に取り込むことでもありました。それゆえ翻訳は決定的に重要な意味を持ちました。たとえば現代日本語は、ヨーロッパ諸言語からの翻訳を通じて形成された言語であるといっても過言ではないでしょう。文章語としての日本語は、ヨーロッパで鍛え上げられた諸概念を担い得る言語として鍛え直されたものです。

このように、近代の入り口においては「言語」は、少なくとも可能態としては、類的存在として理解され得ました。日本のような後発国民国家の諸「言語」も、「国語」として整備され、「近代化」されるならば、ヨーロッパの諸「国語」と理念的には対等であり得、またそうあるべくさまざまな努力が積み重ねられました。また、諸個人にとっても、教育を通じて「国語」のリテラシーを獲得することが、「国民」となることを通じて「人間」を獲得するための不可欠の道筋となりました。後発国民国家は、「近代」に参入し、対等の「国民」を獲得すべく、「国民／国語／文化」という理念型を踏襲し、「国語」を作り上げ「文化」を主張し、さらに「歴史」を発明したのです。

理念型としての諸国民は類的存在として平等であり、それぞれの「文化」も可能態として平等であり得ました。このことは想起すべき重要な事柄です。互いに平等な閉じた系の間では、「翻訳」が成立するでしょう。

3. しかし、現実には言語は類的存在ではない。情報の偏在と language divide は、翻訳の相互性という幻想を突き崩した。

1) 「人間」＝「国民」＝「国語」という「近代」の等式の挫折

しかし、言うまでもなく、現実には諸「国民」も諸「言語」も類的存在ではありません。

「国民」と「人間」という価値を生み出したヨーロッパ近代は、同時に「国民」の外部に「植民地原住民」を生み出した、植民地主義のヨーロッパでもありました。20世紀前半まで、世界の人口は「国民」と「植民地原住民」に分かれていました。「国民」とは植民地化されていない人々のことだったので。かろうじて類概念として成立し得た「言語」とは、日本などの後発国民国家を含め、植民地化されず、かつバジオーニの言う「国語」による「舗装工事」がおおむね完了した国々の言語でした。

さて、植民地支配下にあったアジア・アフリカの「原住民」たちも、当然「国民」となることを希求しました。支配者の「国民」から排除され、「人間」を否定された存在が、自ら対等の「国民」となることによって「人間」を獲得するという目標が、いまでは死語となってしまった「民族解放闘争」の基盤でした。「人間」＝「国民」という等式は第三世界ナショナリズムにおいても踏襲されていたのです。

「植民地原住民」のなかで、最初に「人間」となることを希求したのは、植民地支配者の言語によって教育を受けた植民地原住民エリートたちでした。彼らは当初、支配者の「言語」を習

得することで「原住民」から「人間」の階梯を上ろうとし、次の段階で自らの同胞を「国民」として解放するためのたたかひの先頭に立とうとしました。しかし問題は「国語」でした。そこで「人間」＝「国民」＝「国語」という「近代」の等式は挫折することになります²⁾。植民地原住民エリートが習得した支配者の「言語」は、「国民」のほとんどが理解しない言語であり、そのままでは「国民」の言語とはなり得ませんでした。さらに、脱植民地化によって成立した諸国家は、大多数が多民族、多言語状況にあり、多くの場合「国民」＝「国語」の等式は実現しませんでした。

ベトナムなどの場合のように主要民族の言語を「国語」として整備し、「国民」＝「国語」の等式を実質的に成り立たせた場合や、インドネシアやタンザニアのように多民族の共通語として土着の言語から新たな「国語」を整備することにはほぼ成功した場合がありますが、多くの場合は、植民地宗主国言語を保持したまま、土着諸言語の競合的併存状況を一種の妥協として選択することを余儀なくされています。英語、フランス語などの植民地宗主国言語をいまま公用語にするアフリカ諸国をはじめ、公共空間を支配する言語が「国民」の大多数に浸透していない国家において起こっていることは、ある意味で、すべての「国民」を「人間／市民」とすることは断念し、エリートのみが英語やフランス語を通じて欧米で実現された「人間／市民」に参入するという事態とも言えるのです。

文章語としての英語やフランス語を知るもののみが、欧米の「国民」と対等の「人間」であり得、それ以外の人々は公共空間の外部に放置されるという深い分断が、植民地時代の延長のように存続しています。人々の話す雑多なことばは、「国語」として成立した言語と異なり、「人間」を担保しないのです。

2) 差異を明確化し、排除する「国語」

他方、近代啓蒙主義の理想では平等化をもたらすはずであった「国語」も、現実の諸国家の中では、排除と分断をもたらすものとして成長することになります。王に替わって主人となったのは「国民」ではなく、(たぶん、ブルジョワジーでさえなく) 行政文化テクノクラートでした。「国語」は、平等化するものとしてではなく、差異を明確化し、排除するためのものとして整備されていくことになります。

啓蒙主義の担い手であったヨーロッパ・ブルジョワジーは、いったん自らを支配階級として確立すると、むしろ「伝統」を、自らの正統性と優越性の根拠として援用するようになります。ピエール・ブルデューは、ブルジョワ社会においては、文化が社会格差の再生産装置として機能する、ということを言いました[ブルデュー 1993]。ほとんどの近代国家においては、自由、平等原則が存在し、学校制度は、社会格差を超えて個人の可能性を最大化する一種の平等化装置として機能することになっていますが、その、ほかならぬ学校制度を中心とする文化システムこそが、既存の社会格差を再生産する、というのです。

ブルデューの言う「言語市場」を支配するのは、書かれ、学校で教えられる「正統言語」です。話すことについてもそれに基づく話し方が「正しい」とされます。「正統な言語能力のない話者は、正統な言語能力の使用が義務づけられている社会的領域からは、事実として排除されるか、沈黙を強いられるかのどちらか」[ブルデュー 1993,53]なのです。そして、それにもかか

ならず、その正統な言語能力のない話者も、正統言語の規範を受け入れた上で、自らの言語能力、発音、身振りなどの身体能力を値踏みしながら「言語市場」に参加している、というのがブルデューの分析です。

アーネスト・ゲルナーも、近代産業化社会のリテラシー普及のプロジェクトは、「高文化 high culture」普及のプロジェクトであった、といます。ブルジョワ階級は、民衆にはよそよそしい、洗練された「伝統」をあらたに作り上げるのです〔ゲルナー 2000〕。

実際、ヨーロッパ語では綴り字改革はほとんどすべて失敗するか中途半端に終わっています。啓蒙主義的立場からは、教育を通じた「国語」の普及のためには、語彙と綴り字の統一と簡素化が不可欠のものです。実際、多くの場合そういう方向がいったん目指されますが、統一は実現しても、簡素化という点に関してはほとんどが挫折するか中途半端に終わっています。複雑な綴り字やギリシア語、ラテン語源の難解語は、ブルデューの言うディスタンクション獲得のための不可欠の要素だったのです。

日本語においても明治以降、行政文化テクノクラートによる漢語の氾濫が始まっています。彼らの権威の源となった西洋知識は、大量の漢語を用いて語られる翻訳文化だったからです。日本でも西周の漢字廃止論以来、さまざまな綴り字改革の動きはありましたが、それらは行政文化テクノクラートたちによって葬り去られました。敗戦後占領下で進められた漢字制限も、今再びなし崩しにされつつあります。「国民国家」モデルの破綻と同時に、「平等化する国語」という神話も、類的存在としての「言語」という神話もすでに破綻していることをまず認めなければなりません。

「言語」は等価ではなく、明確に階層化しています。一方には英語を頂点とした文章語の階層があり、それぞれの文章語によって「非正統」とされる言語使用があります。他方には、さらにその外部に置かれた文章語を持たない諸言語があります。文章語は、それを正しく用いられない者たちを排除し、その言語の使用人も階層化します。そうしたなかで語られる「多言語主義」、あるいはバイリンガリズムとは、差別と分断をもたらす階層化した言語使用にほかならないのではないかと思います。

複数の言語を話さねばならないことが問題なのではありません。そんなことならば、日常言語の世界では、大昔から、世界中どこでも、ごく当たり前に行われてきたことです。問題は、複数の文章語の習得という過度の負担が、商品としての人間に高付加価値をもたらすものとして要請されるようになったことにあります。言語による分断は高度化しています。支配言語への情報の偏在は拡大し、上層は上位文章語のポリグロットとなり、下層はますます高文化化する文章語の世界から疎外されることになるでしょう。

類的存在としての言語、文化間では相互翻訳による共通理解の獲得は可能ですが、非対称な関係の中で情報が特定の言語に偏在するとき、翻訳、そして相互理解は成立しなくなります。成立するのは上位言語による一方的な解釈と搾取だけです。

「言語」は問題の現れる場であり、それによって問題を解決することはできません。しかし、「啓蒙の近代」の「平等かつ自由で自律的な主体」としての「人間」という理念を放棄するのではありません。再び「平等化する国語」のプロジェクトを想起しなければならないのかもしれない。

註

- 1) ウイトゲンシュタインは『哲学探究』のなかで次のように書いています。「われわれは〔規則の〕解釈ではなく、応用の場合場合に応じ、われわれが『規則に従う』と呼び、『規則に叛く』と呼ぶことからのうちにおのずから現れてくるような、規則の把握〔の仕方〕が存在することを示すのである（『哲学探究』201）」[ウイトゲンシュタイン 1976,162-3]。つまり、規則に従ってことばを話しているからコミュニケーションが成立するのではなく、コミュニケーションが成立しているとき、そこには規則があると理解されるのです。
- 2) フランツ・ファノン、『黒い皮膚・白い仮面』を「私は言語現象を根本的に重視するものである」という文章で始めています。しかし、『地に呪われたる者』においては言語問題には一切触れていません。ネグリチュードが克服されたのとは異なり、言語問題は克服されたのではなく、回避されています。アルジェリアの民衆と言語を共有せず、彼らの支配者の言語であるフランス語しか用いることのできないファノンにとっては、言語問題についてのオルタナティブを考えることができない状況があったことは想像に難くありません。少なくともファノンには、マルチニックの後の世代が行ったようにクレオール語の可能性を考える余裕はまだなかったでしょうし、口語アラビア語やアフリカ諸言語の可能性を語り得るような状況ではなかったでしょう。どれも整備され近代化された言語とはみなされていなかったからです。自らがアルジェリアの民衆の言語を理解しないという事実は、ファノンにとってどうでもいいことであったとは思えません。事実としてあまりにも重いが故に、語ることを回避したのではないのでしょうか [ファノン 1969,1970]。

文献

- ウイトゲンシュタイン, ルートヴィヒ,
 1976, 『ウイトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』, 藤本隆志訳, 大修館書店
 オング, ウォルター,
 1991, 『声の文化と文字の文化』, 桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳, 藤原書店
 グディ, ジャック,
 1986, 『未開と文明』, 吉田禎吾訳, 岩波書店
 ゲルナー, アーネスト,
 2000, 『民族とナショナリズム』, 加藤節監訳, 岩波書店
 砂野幸稔,
 2007, 『ポストコロニアル国家と言語－フランス語公用語国セネガルの言語と社会』, 三元社
 2012, 「近代のアボリアとしてのリテラシー－リテラシー再考 2」, 『ことばと社会 14号』, 三元社,
 砂野幸稔 (編),
 2012, 『多言語主義再考－多言語状況の比較研究』, 三元社
 互盛央,
 2009, 『フェルディナン・ド・ソシュール－〈言語学〉の孤独, 「一般言語学」の夢』, 作品社
 バッジオーニ, ダニエル,
 2006, 『ヨーロッパの言語と国民』, 今井勉訳, 筑摩書房
 ファノン, フランツ,
 1969, 『地に呪われたる者』, 鈴木道彦, 浦野衣子訳, みすず書房
 1970, 『黒い皮膚・白い仮面』, 海老坂武, 加藤晴久訳, みすず書房
 フーコー, ミシェル,
 1974, 『言葉と物－人文科学の考古学』, 渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社
 1977, 『監獄の誕生－監視と処罰』, 田村俣訳, 新潮社

ブルデュー, ピエール,

1990, 『ディスタクシオン-社会的判断力批判』, 石井洋二郎訳, 藤原書店

1993, 『話すということ-言語的交換のエコノミー』, 稲賀繁美訳, 藤原書店
前田秀樹,

1998/2010, 『沈黙するソーシャル』, 講談社学術文庫

マクルーハン, マーシャル,

1986, 『グーテンベルグの銀河系-活字人間の形成』, 森常治訳, みすず書房